令和３年度豊かなむらづくり顕彰事業　実施概要

本顕彰事業は、集落等におけるむらづくり活動や農業生産活動に顕著な業績を収めている団体等を表彰するとともに、その活動内容を広く紹介することにより、農林水産業・農山漁村の活性化等に寄与することを目的に、関係機関・団体の御支援をいただきながら昭和５６年より実施しており、本年度で４０回目を迎えました。

これまで「むらづくり部門」で１７７団体、「農業生産部門」で９８団体の合わせて２７５団体が、本県における「むらづくり」の模範的な団体として受賞されています。

内　　容	時　　期
事業募集	令和３年４月３０日（金）
現地調査	令和３年８月２７日(金)～９月７日(火) うち６日間
予備審査会	令和３年１０月２７日(水) １４：００～１６：００ ところ：杉妻会館４階　牡丹
本審査会	令和３年１１月２５日（木）１４：００～１５：３０ ところ：杉妻会館３階　百合
表彰式	令和４年１月２１日（金）１３：１５～１４：１５ ところ：杉妻会館４階　牡丹

令和３年度豊かなむらづくり顕彰事業　審査講評

本年度は、６市町から「むらづくり部門」に２団体、「農業生産部門」に４団体の合わせて６団体の御推薦をいただきました。

「むらづくり部門」では、金山町の「奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」が「奇跡のカボチャを町の至宝へ！奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」、南会津町の「ＮＰＯ法人南会津はりゅう里の会」が「針生ならではの「交流」「なりわい」づくりを目指して」、また、「農業生産部門」では、須賀川市の「株式会社　新須賀川農産」が「稲作部門の合理化により個々の経営発展を目指す組織づくり」、矢吹町の「夢みなみ農業協同組合三神支店ＴＣトマト班」が「開拓精神で挑む「世界一のトマト」づくり」、喜多方市の「農事組合法人荒分ファーム」が「一集落一農場で故郷を守る志と農を楽しむ心を次世代につなぐ」、いわき市の「福島さくら農業協同組合いわきいちご部会」が「美味しさと安全・安心を届けて。未来へつなぐ「いわきいちご」」とそれぞれのスローガンの下、地域の特色を活かし、創意工夫を重ねながら、個性的なむらづくりや生産活動が実践されています。

農山漁村に受け継がれた豊かな資源を活用して、地域の潜在的な活力を引き出し、地域の絆を推進力として多大の成果を挙げているこれらの活動は、本県農林水産業の振興並びに農山漁村の持続的発展に大きな役割を果たしておられるところです。

審査会では、いずれの推薦団体においても、今後一層の発展が期待され、他地域の模範となるものと高く評価され、令和３年度豊かなむらづくり顕彰事業の受賞団体として決定いたしました。

その中で「奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」は、特産品である「奥会津金山赤カボチャ」を軸としたむらづくりと地域活性化に取り組まれており、各関係機関との連携の下、赤カボチャの品質と商品価値の向上に向け、栽培現地指導会や研修会等を実施し、ブランド化確立のための商標登録に取り組んでいます。また、町内外の加工事業所と連携して、加工品の開発、販売に取り組むだけでなく、赤カボチャ大収穫祭や料理教室等の地域イベントの開催など、地域の活性化と農業振興に大きく寄与しております。

「奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」は今後も更なる発展が期待され、本表彰事業の趣旨に最もふさわしい団体であることから、令和４年度「豊かなむらづくり全国表彰事業」に本県代表として推薦することといたしました。

各受賞団体の皆様には、今後もむらづくり活動に積極的に取り組まれ、豊かで活力あふれる地域を次世代に繋げていただくとともに、本県農林水産業並びに農山漁村の健全な発展に引き続き御尽力くださいますようお願いいたします。

（審査長　福島県農林水産部長　小柴　宏幸）

令和３年度豊かなむらづくり顕彰事業　受賞団体の概要

【　むらづくり部門　】

◆奥会津金山赤カボチャ生産者協議会（金山町）

キャッチフレーズ

「奇跡のカボチャを町の至宝へ！奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」

奥会津金山赤カボチャ生産者協議会の皆さん

金山町では過疎・高齢化が進む中で、町の特産品の開発・生産と、生産をとおしたコミュニティづくり、農作業による健康長寿の町づくり、特産品による都市との交流に向けて、むらづくりを検討していた。

昭和 50 年代後半から町内で栽培されてきた奥会津金山赤カボチャは、特徴的な外観と味の良さから、特産品として期待され、赤カボチャを地域振興を図る軸としたむらづくりが始まった。

平成 20 年に「奥会津金山赤カボチャ生産者協議会」を設立し、当初の 35 名から会員数を増加させ、現在 94 名で赤カボチャの生産や加工等の取組みを展開している。

当協議会が生産する赤カボチャのブランド化を確立するため、平成 21 年には「奥会津金山赤カボチャ」を商標登録し、平成 30 年には地域団体商標を登録した。

赤カボチャの品質と商品価値の向上に向け、パイプハウスを使用した空中栽培と適温で一定期間貯蔵するキュアリングに取り組むほか、各関係機関と連携して「栽培現地指導会」や「栽培研修会」を実施し、出荷量と販売額を拡大している。

また、町内外の加工事業所と連携して開発した羊羹やプリン等の加工品の販売、赤カボチャ大収穫祭や料理教室等の地域イベントの開催など、地域の活性化と振興に大きく寄与している。

◆ＮＰＯ法人　南会津はりゅう里の会（南会津町）

キャッチフレーズ

「針生ならではの「交流」「なりわい」づくりを目指して」

事業について話し合うＮＰＯ法人　はりゅう里の会の皆さん

南会津町針生地区では林業産出額の減少や少子高齢化・過疎化の進行により、住民間で健康や生活、孤独・孤立への不安が広がっていた。

平成 24 年頃から地域住民・移住者が個々に実施してきた自発的な活動を、持続的、組織的に継続できるよう、平成 25 年に「ＮＰＯ法人南会津はりゅう里の会」を設立した。平成 26 年に交流施設である「ほしっぱの家」を整備し、交流事業やイベント等を展開している。

当ＮＰＯでは、森林資源の活用と仕事づくりを結びつけるため、平成 26 年に「アロマ事業」を開始し、多様な就業機会の確保を図っている。平成 27 年から開催している「アロマ祭り」の来場者は年々増加しており、第５回目となった令和元年度の来場者は 1,700 名と、地域のイベントとして定着している。

また、はりゅうミニ音楽祭や滞在型交流事業などのイベントの開催や、都市の大学生との交流活動などの実施により、地域コミュニティの交流活性化や移住、定住に大きく貢献している。

【　農業生産部門　】

◆株式会社　新須賀川農産（須賀川市）

キャッチフレーズ

「稲作部門の合理化により個々の経営発展を目指す組織づくり」

株式会社　新須賀川農産　構成員の皆さん

須賀川市山寺地区では、農業者の多くが園芸品目と水稲の複合経営に取り組んでいたが、園芸品目の生産性を向上するためには、稲作との労働競合が長年の課題となっていた。平成 18 年に地区内の若手農業者 12 名が稲作機械等の共同利用、作業受託に取組む農業法人として「株式会社　新須賀川農産」を設立。平成 19 年にライスセンターを建設したことにより、各構成員の稲作にかかる経費や作業負担が軽減され、園芸品目等の規模拡大や収量・品質の向上が図られた。

当法人では県酒造組合と結びついた加工用米（品種：チヨニシキ）を作付けし安定した経営を実現するとともに、水利の悪い水田には大豆を作付けするなど、遊休農地の発生防止にも努めている。

また、当法人は須賀川市山寺地区以外の３地区でも、人・農地プランの中心経営体として位置付けられており、地域農業の維持・発展に貢献するとともに、地元小学生を対象とした食農教育に取組むなど、地域活性化にも寄与している。

◆夢みなみ農業協同組合三神支店ＴＣトマト班（矢吹町）

キャッチフレーズ

「開拓精神で挑む「世界一のトマト」づくり」

夢みなみ農業協同組合三神支店ＴＣトマト班の皆さん

矢吹町三神地区では、昭和 30 年代後半から夏秋トマト栽培が行われ、平成６年に現在の班員２名による養液栽培が開始されたことから、平成７年に組織化を図り、班員とＪＡが一体となって養液栽培を振興し、技術の向上を図りながら、ブランドトマトの確立に取組んできた。

平成 10 年頃から冬季間の高糖度トマト栽培への挑戦を始め、平成 22 年には安定的に生産できる栽培技術を確立した。

また、他産地の高品質トマトとの差別化を図るため、糖度９度以上の高糖度トマトを「旬太郎トマト」としてブランド化し、矢吹町三神地区の知名度アップにも寄与している。

班員の栽培技術が三神地区の夏秋トマト生産者へも導入されており、地区のトマト栽培全体の技術向上に大きく寄与している。

平成 30 年２月にＪＧＡＰ団体認証を県内で初めて取得し、農産物の安全と経営改善を進める体制を整えるだけでなく、農業短期大学校の学生実習として２～３名の受入れを毎年実施するなど、地区のトマト栽培技術の継承と、県内のトマト栽培後継者育成に大きく寄与している。

◆農事組合法人　荒分ファーム（喜多方市）

キャッチフレーズ

「一集落一農場で故郷を守る志と農を楽しむ心を次世代につなぐ」

共同田植えに参加した荒分ファームと荒分集落の皆さん

喜多方市荒分集落では、集落内に中核となる担い手農家がいない中で、自分たちの力で無理なく農地を守り、集落機能を維持していく方策について話し合いを重ねた結果、人・農地プランを活用した集落営農組織を経て、「農事組合法人荒分ファーム」を設立し、集落内の農地のほぼ全面積を集積している。

当法人では、近隣の畜産農家との耕畜連携で、堆肥施用による飼料作物とソバの二毛作を過半の水田で行うとともに、ソバを活用した６次化（オリジナル商品の開発・販売）にも積極的に取り組んでいる。

また、集落内の共同作業や「共同田植え」「収穫祭」等の親睦を深める事業において中心的役割を果たすとともに、集落内の後継者を対象とした次世代懇談会を定期的に開催しており、これらの活動により新規就農者が育ちつつある。

さらに、隣接３集落が連携して農地・水の保全管理に取り組むとともに、農業生産や農産加工に取り組む近隣の３団体で協議会を設立して農産物や農産加工品の販売に積極的に取り組むなど、地域の振興と農業の維持発展に大いに貢献している。

◆福島さくら農業協同組合いわきいちご部会（いわき市）

キャッチフレーズ

「美味しさと安全・安心を届けて。未来へつなぐ「いわきいちご」」

保育園でいちごを手渡す部会の関係者

いわき市のいちご栽培は、昭和 20 年代後半から夏井地区において始まり、当部会は昭和 44 年の設立当初から、市内のいちごの栽培の普及拡大に大きく貢献している。

先端技術の積極的な導入による生産力の向上や栽培技術の向上に加え、高設栽培者４戸によるＦＧＡＰの認証取得や土耕栽培者によるエコファーマーの取得等、食の安全・安心と消費者の信頼確保にも取り組んでいる。

平成 14 年度には、県オリジナル品種「ふくはる香」を導入し、現在は部会全体の出荷量の７割を占め、さらに全量を市内の市場に出荷することで「ふくはる香」のブランド育成に貢献している。

また、東日本大震災後は放射性物質の自主検査を実施し、風評の払拭に努めるとともに、市内外で消費者向けのＰＲイベントを積極的に開催し「いわきいちご」の知名度向上に取り組むほか、市内保育園・幼稚園を対象としたいちごの贈呈や県立磐城農業高等学校が製造するいちごジャムの原料を提供するなど、食農教育や地域活性化に大きく貢献している。